

「倭人社会鏡文化の始まりと朝鮮半島の鏡文化」を聴いて

聴講日：R 3.3.6
むきばんだやよい塾第21期

倭人社会の鏡とは? 既成概念との相克

日本考古学の中で銅鏡は、ヤマト王権の威信財と言われています。それは古墳時代になるとヤマト王権が威信財として鏡の配布と古墳の築造を通して各地域種族と関係を結んでいくため、銅鏡が重要な遺物として取り上げられているからです。ある意味では、後に成立する三種の神器の概念と混同されているのかも知れません。

日本において鏡は絶対的な不変の威信財として扱われていますが、韓国では日本ほどではありません。日本列島では弥生時代から古墳時代を通して5～6000面の鏡が出土していますが、同じ時期に韓国で出土している鏡はおよそ700面あまりで、出土数に桁違いの差があるので、韓国と日本では鏡文化に差があることがわかります。韓国で鏡はエリート層、いわゆる上流階層がもつ威勢品であり、威信財という言葉は国家的祭祀を担う遺物を言います。とは言いながら、韓国でも鏡は特別な扱いを受けています。

日本では舶載鏡と言われる中国から輸入した鏡が重視され、中国との直接交渉から始まったと思われていますが、意外なことに日本に最初に現れる鏡は中国の鏡ではありません。普通の青銅鏡は真ん中に一つの鈕(つまみ)があり、鈕には紐を通す孔が開いていて、紐を通して手に持つかぶら下げます。この鈕が二つ或いは三つ付いたのが多鈕鏡と呼ばれ、日本に最初に現れる鏡です。

多鈕鏡は中国遼寧省、吉林省から朝鮮半島にかけて分布する特殊な鏡です。その最終段階を多鈕細文鏡と言いますが、これが日本で用いられる最初の鏡となります。多鈕鏡は副葬品として北部九州で出土していますが、支石墓と呼ばれる墓制の分布と重なっています。支石墓は、朝鮮半島西南部に分布する墓制の影響を受けて九州に見られる墓制です。

日本最古の青銅器は、福岡県の吉武高木遺跡の木棺墓の副葬品として出土した多鈕鏡です。日本列島にはこれより古い青銅器はなく、青銅器文化も多鈕鏡と同じ時期に始まっています。

韓半島の鏡文化の概要

朝鮮半島の鏡は、中国中元の鏡とは違い、東北アジア独特の鏡で、成立は紀元前6世紀から5世紀の頃と言われています。中国東北部や朝鮮半島北部で始まり、この段階の多鈕鏡には雷の文様があり、雷文鏡と呼ばれて、鄭家窪子6512号墓などから出土しています。その後分布域は京畿道牙山南城里石棺墓など南に進出し、粗細文鏡と呼ばれ、鑄型の出土例もあります。新段階(細文鏡)では全羅北道を中心に分布します。

2～300年を経て九州北部に伝わりますが、墓の副葬品としては、九州から下関までです。大阪や信州からの出土品は銅鐸といっしょか、ペンダントとして使われたもので、副葬品ではなく、出土時期も後期なので九州から中期に出土する鏡とは同じ扱いにはなりません。この最終段階の多鈕細文鏡は、文様が非常に細かくて石の鑄型では困難なので、土の鑄型を使い、そのため同じ模様の鏡はよほど特別でなければ作れないと思われます。石の鑄型から土の鑄型に変わる段階の鏡と言えますが、日本に最初に入ってくるのがこの多鈕細文鏡ということになります。

紀元前2世紀頃に東北アジアに中国鏡が流入してきます。韓半島北部(楽浪地域)に登場し、その後南東部(慶尚道)を中心に分布します。模倣鏡(仿製鏡:朝鮮半島の中で中国鏡を真似て作られた鏡)も盛んに作られます。漢鏡文化の中心は慶州あたりから釜山、茶戸里です。漢鏡が流入して栄えるころに、多鈕鏡を墓に副葬する文化の中心地である韓国の西海岸では、三国時代(5世紀の後半)に鏡が再登場するまで、鏡を副葬する文化が途絶えてしまいます。この鏡を墓に副葬する文化が途絶えることと、多鈕鏡の終焉には因果関係があるのではないかと考えられます。朝鮮半島の鏡文化の盛衰の中で、多鈕鏡の衰退が大きなポイントを持っていると考えられます。

全州市から完州郡にまたがる、新豊、葛洞、原長洞、徳洞、万成洞など海拔30m余のなだらかな丘陵地の墳墓群で、多鈕鏡が約20面(粗細文鏡を含む)出土しています。

韓国南部では、遺跡を思わせる地表の構造物がないので、多鈕鏡の出土は畑を開墾中であつたり、水道管理設工事中であつたりなど、偶発的な出土になるのが普通です。しかし、ここの遺跡群は20世紀後半から大規模な都市開発計画が持ち上がって、計画的に広い範囲を発掘したために発見された貴重な遺跡です。

既存の分析手法は、墓壙規模と副葬品の違いによる階層分類で、被葬者を3～4階層に分類していますが、この方法に従うと、近接した範囲であるにもかかわらず一大家族の中で身分差があるようになってしまいます。

この地域は支石墓、或いは支石墓に類似した松菊里型の埋葬が長期間継続していますが、全く違った土壙墓が流入しています。この墳墓形態の変化から北方からの渡来支配階層者論がありますが、土器文化が大幅に変わるとか、青銅器との組み合わせが変わるとかの確実な論拠がありません。また「副葬品」の定義が欠如しており、墓から出土したものを全て副葬品として扱っています。

副葬品とは墓の中に丁寧に埋葬されたもので、バラバラに壊された状態で備えられた遺物は、墓地の上や土壙の中で行われたお祀りや埋葬のための儀式(儀礼行為)の遺物であり、副葬品とは別にすべきです。

出土位置を規定するには、頭位がどちら側かを特定し、鏡が頭、胸、足元のどこに置かれたのか判定します。出土状態から完形(欠損)品と破損品(意図的破損)の区別します。このように出土状態や出土位置などを総合的に考えて整理し直します。

全羅北道「原長洞遺跡群」の概要と分析

剣の切っ先を頭部の方向に向けたり、土器は足元付近に置かれたり、副葬位置に規則性が認められます。完形鏡副葬から破鏡副葬へ変化し、最後は破碎散布(埋葬儀礼)品へと変わり、鏡以外の青銅品の破片も混じります。破鏡副葬の段階までは、希少となった鏡を分割して数を増やす意図があったかもしれませんが、破碎散布の段階では鏡であることの意味も失われ、埋葬儀礼の道具として扱われています。

器物の出土状態を整理すると、①被葬者の身に着けて納めた、②棺内あるいは墓壙内の遺体近くに配置、③木棺上または木棺に接するように据えたもの、④木棺周りの充填土内に放置、⑤棺内外に器物を打ち割って撒いた、⑥葬礼最終段階で墓壙埋土上部(面)に据えたものに分類されます。

古い段階はセットで、完形で音がでる祭器とも共伴しますが、時代を経るに従い、セットの構成が欠けてきて、最終段階では、割れた鏡である比率が高くなり、散布されているだけで、祭器や玉類の副葬がなくなってきます。ついには多鈕鏡の文化は全羅北道で途絶えてしまいます。この地域では、鏡そのものの用途・意味あいに変質するので、多鈕鏡を作らなくても中国鏡を取り入れるわけでもなく、鏡に頼らない権力構造が出来上がってきていた可能性があります。

倭入社会の鏡観を見直す

この集団は鏡と無縁の生活を2～300年続けている可能性があるという大胆な推理をしています。この集団は鏡に一定の権威性を持っており、最終段階の多鈕鏡を用いている集団で、一部が日本に渡ってきました。日本に渡った集団は、故地である全羅道の鏡作りがなくなっているため、中国鏡に変化していく朝鮮半島南東部勢力とのつながりを強めます。これが日本の中国鏡文化の始まりの形です。しかしこの文化は西北部九州の多鈕鏡をもっていた集団の中でしか広がりません。弥生時代を通じて鏡の副葬文化は北部九州から発展せず、卑弥呼の時代でも、大和や瀬戸内では鏡は副葬されていないのです。

鏡は特別な権威のあるものと固定観念的にとらえると、見誤る可能性があります。なぜなら、弥生時代から卑弥呼の時代にかけての近畿・畿内の鏡文化は、それより前の時代に割れた鏡を生活の中で用いるのが鏡の文化で、九州の鏡文化とは違うからです。

中国鏡の前に入ってきた多鈕細文鏡は、銅鐸と同じように個人ではなく集団のお祀りなどに使い、銅鐸といっしょに人里離れた山中に埋納されます。この九州で波及する鏡の文化と、近畿・畿内の鏡の文化は全く異質なもので、そのことを鏡文化の出発の段階の時に抱えていることを見直さなければなりません。これは、卑弥呼の時代に九州の地の人が鏡に対してどのように思っていたか、瀬戸内の人々がどう思っていたか、関西の人々がどう思っていたか、が重要なベースになります。入手時期や使用時期、埋葬形態などを含めて出土状態を見極めながら考えないと日本の鏡文化も正しく把握できないのではないかと考えています。